現場と哲学の接点

研究室紹介

村　上　靖　彦*

Contact point of the field and the philosophy

Key Words：phenomenological qualitative research nursing study

大阪大学人間科学研究科「哲学と質的研究」研究室は、前身の「現代思想」研究室を2018年に改名したものです。

大阪大学には文学研究科に二つの哲学の研究室があるのですが、実は人間科学研究科にも3分野からなる哲学の講座が1970年の設立当初から開設されていました。人間科学研究科は実験を重視する心理学や教育学・社会学の各研究室を抱えている部局ですので、それに応じて哲学もまた学際的で横断的な意味を持つことになります。「哲学と質的研究」という名称もまた、この学際的な性格を反映したものとなっています。

本研究室を紹介するためには、まずなぜ「哲学」と「質的研究」という通常は関係がない分野が2つ重なっているのかをご説明しないといけません。社会科学や看護学などの経験科学は量的研究と質的研究に区分されることが多いです。いうまでもなく量的研究は数式や統計を用いて計量を行う学問です。これに対し、データが持つ質的研究は計量化しえない内容を学問化しようとする試みで、GTAやエスノメソドロジーなどさまざまな方法論があります。現象学はもともと20世紀初頭にオーストリア出身の哲学者エトムント・フッサールによって作られた哲学上の方法論で、本来は質的研究が興った経験科学とは無縁のものでした。ところが世代を経るにしたがって当初意識構造を調べる一方法論だったものが、身体論や制度論など拡張していくのにともなって人類学や精神分析学・社会学などの知見を吸収するようになりました。

そして今から20年ほど前、看護学のなかで「現象学」という哲学の方法論を用いて実践現場を記述する研究者が現れました。現在は首都大学東京の教授である西村ユミ氏が行った、植物状態（遷延性意識障害）患者への看護実践のフィールドワーク研究がその出発点です（西村ユミ、『語りかける身体』（講談社学術文庫、2018；初出はゆみる出版、2001）で読むことができます）。医学的な定義上はコミュニケーションをとる能力がないとされている植物状態の患者と、にもかかわらず看護師たちは「コミュニケーション」をとりながらケアを行います。この事実への驚きから始まった西村の研究なのですが、当初生理学的な手法で患者の状態を調べようとして失敗した結果、西村は現象学に導かれることになります。医学的なエビデンスではなく、看護師に経験された意味を探求することで、この「コミュニケーション」の内実を明らかにすることに成功しました。西村の研究は看護の世界に大きなインパクトを持ち、賛同者を増やします。それが年月を経て「現象学的な質的研究」と呼ばれて認知されるようになった研究動向になります。彼女の研究をきっかけとして、現象学と看護を中心とする実践現場とがクロスオーバーする学問分野が始まりました。

その後、この研究技法は看護学だけでなく哲学あるいは教育学や他の医療領域の研究者を巻き込む形で発展します。2009年に当時大阪大学に在籍した西村氏を中心として研究会が始まり、これをもとに発展してきた「臨床実践の現象学会」に研究者が集まって活動することになってきました。このような経

* Yasuhiko MURAKAMI
1970年10月生まれ
現在、大阪大学　人間科学研究科
基礎人間科学講座　哲学と質的研究分野
教授（PhD. 基礎精神病理学・精神分析学）　哲学・現象学的な質的研究
TEL：06-6879-8075
FAX：06-6879-8075
E-mail：murakami@hus.osaka-u.ac.jp

緯のなかで「哲学と質的研究」研究室は生まれました。

現象学的な質的研究の特徴は、(1) 個別の実践・経験についてその運動の内側から実践・経験の骨組みを描き出すこと、(2) それゆえに複数の事象の平均値ではなく個別の事例の個別性にこだわって描き出すことにあります。たとえばICUのように急な病や事故で患者が運び込まれて、来歴も家族関係もわからないまま看取りをサポートする看護師の場合、突然切断された患者と家族の関係をつなぎなおすスキルがそれぞれの看護師独特の仕方で磨かれていきます。ある看護師が語った突然夫が意識不明に陥っている場面に遭遇した妻による看取りの場面では、まず過去の思い出を語ってもらい、次に「旦那さん、今、何て言うと思います？」という今現在についての「もし」という反実仮想の想像を促し、そして最後に「ぎゅって抱き締めたりできるんですよ」というボディランゲージという三つの回路をたどっていました（井部・村上2019, pp. 43-45）。〈複数の回路を探しだして家族関係のつなぎなおしを図る〉というのはこの人だけが持つ個別のスキルですが、しかし何か参考になる支援のモデルとして読者を触発します。

多くのサンプルから中央値や平均値、類型をとりだす統計を用いた研究ではこぼれておちてしまう、一つひとつの実践・経験のディテールの意味をとりだすことが研究の目的となります。もちろん統計を用いて取り出される知識は重要ですが、たとえば医療現場のようにそれぞれの人の生き死にが問われる場面では、統計からはこぼれおちるものにも大事な意味が潜んでいます。人生のなかのニッチなものの意味を確保することが、現象学的な質的研究の大目標となっています。

さて「哲学と質的研究」研究室の紹介に戻ります。筆者自身はもともとフランス哲学の研究者でしたが、ふとした縁で2003年から小児科病院で小児科医や精神科医・臨床心理士とともに自閉症児の研究を始めることになり、哲学と医療現場をつなぐ研究を開始しておりました。そのあと、大阪大学への異動とともに西村氏と出会い、当時黎明期だった現象学的な質的研究の研究者グループに合流し、看護実践の研究を始めました。つまりこのグループと出会う前から自分なりの方法で現象学的な質的研究を行っていたのですが、看護研究と出会うことによってより自分の研究の位置付けが明確になりました。

私自身は、これまでこの分野にかぎっていうと自閉症についての『自閉症の現象学』、心理臨床について現象学的に考察した『治癒の現象学』、看取りを中心とした看護についての『摘便とお花見』、助産師と精神科看護師を中心とした『仙人と妄想デートする』、虐待をしてしまった母親のためのグループプログラムを分析した『母親の孤独から回復する』、訪問看護師を描いた『在宅無限大』、専門看護師たちとの共著で『専門看護師のコンピテンシー』といった書物を著してきました。現在は貧困地区での子育て支援をめぐる多職種連携をフィールドワークしています。死や虐待のような困難な状況へと応答する人をサポートする支援者に自分の関心はあります。

さて、このような流れのなかで授業では、フランス哲学とともにインタビュー分析の授業を行ってきたのですが、次第に現象学的な質的研究を希望する入学者が増えてきたこともあり「哲学と質的研究」という名称に研究室名を変更しました。

「哲学と質的研究」研究室は現在20名強の大学院生を抱えています。がん・在宅・精神・小児・母性・集中治療領域といった看護のさまざまな領域の実践者や他大学の教員である社会人の大学院生、作業療法士、臨床心理士、ジェンダー論、そして伝統的な哲学研究を専門とする大学院生が所属しています。さらに今までの卒業生のなかでは京都の庭園の修復に関する研究やコンテンポラリーダンスのトレーニングについての研究での博士論文も執筆されており、必ずしも医療にしばられない広い実践現場についての研究が行われています。つまり (1) 人間の経験に関わり、(2) 個別性の高い事象についてその発生構造を問う、という基本となる目的をもつ場合には、広い分野に渡ってこの技法を用いることができます。医療現場で始まりましたが、そこにとどまる理由はまったくありません。

「現象学的な質的研究」という若い研究分野は、研究者や実践者の内発的な要請から生まれた学問です。「哲学と質的研究」研究室は首都大学東京成人看護学の西村研究室とともにこの分野を展開するための拠点としての機能を担っており、これからさまざまな形で拡がっていくのではないかと思います。

井部俊子・村上靖彦共編（2019）.『専門看護師のコンピテンシー：現象学的分析』、医学書院
村上靖彦（2008）.『自閉症の現象学』、勁草書房
村上靖彦（2011）.『治癒の現象学』、講談社
村上靖彦（2013）.『摘便とお花見　看護の語りの現象学』、医学書院
村上靖彦（2016）.『仙人と妄想デートする　看護の現象学と行為の哲学』、人文書院
村上靖彦（2017）.『母親の孤独から回復する　虐待のグループワークに学ぶ』、講談社
村上靖彦（2018）.『在宅無限大　訪問看護師が見た生と死』、医学書院
西村ユミ（2018）.『語りかける身体』、講談社